

# 大陸（南支）

直兵団、

広東警備異常なし

千葉県 秋山憲夫

宮城の農家の出身で、私は九人兄弟の三番目です。今、実家は亡くなった長兄の甥が継いでいます。

私は、昭和十七年九月六日に新潟県村松町東部第六十八部隊に入隊しました。初年兵の時は寝ているときは内務班教育、起床してから一挙手、一投足が軍隊教育です。型にはまった初年兵教育のほか、入隊前には想像もしなかった。上下・縦横・命令・服従の関係を教わったり、自分で勉強したり、否応なく覚えさせら

れました。このようにして三カ月経ち、初年兵教育の総仕上げとして、福島県会津磐梯地区で行われた大隊連隊の秋季大演習に約一週間参加、第一期の教育を無事終了し、やれやれでした。

有り難いと思ったことは宮城の郷土兵をはじめ福島、新潟など気候風土の同じ県の兵が主力で、内務班でよく田舎のことを話し合い、訓練中もよく助け合ったものです。その中の何人かとは中国の勤務地も復員も一緒に今でも戦友会などを年に一回開催しています。戦線も拡大しているので内地勤務で済むなどと夢にも思っていないませんでした。北方なのか、大陸なのか、南方なのか検討もつきません。その後、軍隊で何回かの転属をしましたが個人に運、不運はつきもの、軍隊とは連隊の別名ということがよく分かりました。

十一月に千葉県佐倉の東部第六十四部隊（第五百十七連隊）に転属し、出発を待機していました。この間、朝夕の駆け足と体操ぐらいで激しい訓練もなく、日曜日の成田への引率外出が楽しみでした。

昭和十七年十二月の空っ風の吹く日、村松からの初年兵が宮庭に二列横隊に何組かに並ばされ番号の結果、奇数一步前へ、で南方行きと大陸行きに分離されたのです。それが私の大陸での軍隊生活への第一歩でした。

十二月下旬、佐倉を出発、品川から軍用列車で一路、門司へ向かいました。門司で一泊、二十四日、輸送船に乗船、祖国を後に東シナ海を南に進み、昭和十八年一月一日、広東省黄埔港に入港上陸し、列車で広州駅に向かいました。沿線は椰子やパイヤの木が生い茂り、厳寒の内地とは大違いでした。

配属になった独歩六十六大隊は通称井上部隊といい、珠江の右岸、海珠橋のたもとの三階建てのビルを占拠していました。出光部隊に二日ほどおり、われわれ初年兵は各中隊に配属になりました。私は珠南警備の第四中隊でした。小高い丘の元軍官学校の建物で内地の

古ぼけた連隊の建物とは比べ物になりません。新兵が来たのでわれわれは帰還要員だと大歓迎されました。しかし、それも二、三日のことで、小隊ごとの配属がきまると直ちに現地訓練です。教官は佐倉から同行の山崎見習士官です。現地に即した訓練ということで、墓地の利用、小部落の攻撃、クリーク渡河作戦、トーチカ攻撃と初年兵教育では想像もしていなかった訓練です。この訓練が、中国滞在中の私の戦闘、訓練、警備の基礎になりました。

昭和十八年、第六十六大隊は田賀部隊と交代し、新会真江門に移動し、その地区の警備に当たりました。

太平洋戦争風雲急をつけ、南方から内地への輸送路はたたれ、アメリカ軍の中国上陸作戦が噂にのぼるほどになりました。これを打開するため、湘桂作戦が実施されたと後で聞きました。

そのため、新たに直兵団を新設、広東周辺の警備に任ずることになりました。昭和十九年二月、第一〇四師団、独立混成第十九、第二十二旅団などから基幹要員を差し出し、現地召集者及び内地からの派遣の補充

兵をもって編成され、独立歩兵第二三九〇第二四二大隊からなりたっています。旅団の合計人員六千名、馬匹三百頭といわれています。そのとぼちりを受けたのが私たちでした。私の属した独立混成二十二旅団から直兵団の第二四二大隊要員の補充を受け持ち、井上部隊から同大隊第一中隊の基幹要員を提出しました。当初、南方の戦闘兵団要員故、なるべく若く優秀な兵をということで七次、八次、九次と若い兵から選出されました。

村山、佐倉、広東、江門以来の訓練・警備・戦闘を共にした戦友の別離である。戦死、戦病で別れるのは覚悟の上のこと、こうして生木を裂かれるように分離するとは夢にも思わなかった。中にはおおいおい男泣きする者もいました。改めて軍組織の非常さを知ったのである。

小鷹中隊長以下四個小隊長が選ばれ、ここに新たに独立歩兵第二四二大隊小鷹中隊が発足したのです。

三月十日、各中隊の転出者は大隊本部宮庭に集結し、母隊と決別し、一路、広東の関村軍官学校跡に集合し

ました。ここは元第四中隊が駐屯していたところである。

訓練に明け暮れるとともに警備部隊の性格が明確になり、四個小隊が三個小隊になり、私は第四小隊から第一小隊の吉岡隊に編入になりました。

四日に大隊は中山県石岐に移駐し、節兵団第一二六大隊（小屋迫）と警備交代を行い、各大隊も同様、節兵団警備担当地区の委譲を受け、ここに任務の交代は完了したのですが、何しろ二割減の兵力で同じ面積の地区の治安を維持するので目に見えぬ苦勞が将校・下士官・兵に見受けられました。

第一中隊（小鷹隊）は浮坪地区警備につきました。その間、私は広東の貨物廠に教育のため三カ月派遣になりました。

吉岡隊は小欖地区の警備についてましたが、私も帰隊後直ちに岩山分哨に勤務、上番、下番を繰り返していました。小人数の分哨は気苦勞が多く、また大海の中の小島のようなもので、住民との折衝には四六時中、心をくだきました。

五日、吉岡小隊長他数名が広東白雲山下士官学校に機関銃教育のため派遣されました。六日、第三小隊は部隊本部勤務となり、第二小隊は小禮地区警備となりました。ポルトガル領澳門の周辺の治安が悪化したため、急遽第三小隊が前山塞に派遣になり、その警備に就きました。このように手薄の上、治安の悪化に伴い東奔西走しました。

日が経つにつれ、浪網沙付近の治安が悪化しましたので、地区警備の必要上小哨を設置することになり、無けなしの兵力の中から第二小隊長関淳一以下約一個小隊と前野兵長以下機関銃の一個分隊が配属され、治安の維持と交通路の確保に努めたのです。

八月には士気高揚のため大隊本部で銃剣術大会が行われ、わが中隊が見事優勝しました。八月十六日、第三小隊有田中尉等は第二小隊関少尉以下と浪網沙小哨を交代しましたが、その帰途敵の待ち伏せに遭い、小鷹中隊長以下二十名前後戦死するという戦闘がありました。村松連隊以来の何人かの戦友も含まれ残念でたまりません。

昭和十九年十月、第一中隊は浮坪地区から九江地区に警備交代した。米の収穫期で思わず宮城の秋を思い出した。九江の警備地区は馬鞍岡小哨、軍舟橋分哨、馬頭分哨、中隊本部衛兵などでした。

戦況の急迫につれ集成大隊を編成することになり、吉岡少尉以下三〇名が仏山地区に分遣になり、旅団司令部から林田大尉が着任してきました。吉岡中尉は副官と情報主任を兼務することとなり、私も吉岡中尉の下で情報収集することになりました。

各中隊は大陸の決戦に備えて三交代で作業に従事し、その合間に討伐、昼夜の別がないとはこのことかと思いました。治安も次第に悪くなり、一人、二人の連絡では襲われる危険がでてきました。

私は一時仏山の集成大隊から中隊に復帰、討伐中に再び集成大隊の初年兵教育のため、野中、池田の両兵長とともに分遣になり、初年兵教育中に敗戦を迎ええました。

その間、各中隊では戦況切迫による司令部要請で斬込隊を要請し非常に備えていました。その中、日本無

条件降伏の報が住民の口から口で伝わり、「アッ」と言う間に軍票・儲備券の大暴落です。

昭和二十年八月十五日、日本軍無条件降伏する。

大隊は仏山地区を撤収、広東に向かう。

八月末市内で新編第一軍による武装解除。九月十日広東地区から河南地区関村に移動。十月十八日関村地区から広東の河南地区、東亜倉庫跡に集結しました。

いつ復員できるかわからぬため野菜作りをしたり、市内の清掃のための使役もしました。また復員後のことを考えて希望者には英会話の講習もあり、農業講座も開催されました。

士気を弛緩させないため、はじめは小隊対抗の運動会から大隊対抗の運動会へ発展していきました。昭和二十一年三月二十八日、早朝黄埔に向かって出発し、黄埔で新編第一軍の検査を受け、そこに一泊しました。三月三十日、帰国のために、サンパンで黄埔を出発しました。引揚船の来るまで一時上陸して待機している中に米国のリバティ型戦時貨物船が到着しました。三月三十一日夜半、乗船を開始、出航しました。

四月三日ころ、コレラが大発生し死亡者続出。帰国を前にして中隊から何人かを後部甲板から水葬にする。復員を前にして亡くなった本人の心情を思うと泣くに泣けない。しかし健康者に感染してはと友情との板挟みに苦しみました。

四月十日、桜咲く故国に着きましたが、コレラ船のため上陸ができない。台湾坊主来襲で、千葉沖に流される事故にも見舞われました。食糧は通船で運ぶが不足気味で、煙草もなくなる。船内の人心は荒れ気味で、賭博は公然となりました。

五月十日、久里浜に上陸、陸軍重砲兵学校跡に隔離、検査が行われ、五月二十日ようやく復員が決定し、各人故郷に帰りました。

直兵団編成以来二年四カ月、我が部隊はここに解散し歴史を閉じました。

平和な毎日を送っていますが、中国の警備や討伐のことを思うと夢のまた夢で、今はただ亡き戦友の面影を朝夕偲んでいます。